

平成 22 年度事業報告

社会福祉法人四天王寺福祉事業団

大きく移り変わる制度と年々厳しさを増す社会環境の中、社会福祉法人は措置時代に描かれた行政主導のサービス提供の実践のみではなく、自立・自律した運営と実践の確立が求められている。我々はこれに真摯に取り組み、創業時と変わらぬスタンスに基づいて利用者が抱える問題の解決に貢献し、それが利用者の満足と職員の成長、満足につながる事業展開を目指した。

事業方針において「自律」をキーワードに「労務、サービス、財務」の三本柱の強化をうたい、コーポレートガバナンスに関しては当初より重点課題として位置付けていたが、果たして平成 22 年度も我々は様々な危機を体験した。これらの危機への対処を通じ、本部で一本化し、法人全体でスピーディーに取り組む体制作り資する貴重な経験を積むことができた。経営リスクモデルの強化に努めると共にデータの正確性および信頼性の点検、業務効率の増進、経営方針の遵守を促進するべく内部統制に努めた結果、平成 23 年度の組織再編に繋がった。

経営計画書の運用については顧客のニーズに応え、価値あるサービスを提供するために PDCA を積重ね、積算根拠に基づいた予算と計画の立案、業務能力とサービス提供能力の開発と向上を目指し、経営計画書の完全実施に向けて取り組んだ。サービス標準書の作成と定期的な見直しを通じ現場参画を推進する一方、役職者においては管理スキルを向上し、経営計画書の精度を上げるべく日々の実績データの管理に取り組んだ。半期決算はその成果であり、年度途中で経営指標等の修正を行い、下半期はその達成を目指した。これらの取り組みの結果、施設ごとの管理精度の偏差が小さくないことが判明したことは今後の課題である。

法人機能の醸成については、粛々と計画を実施した。数年に亘って取り組んできた各部会、委員会の活動を通して多くの職員に機会とチャンスとラポール形成の場が提供され、人財の発掘・育成に繋がっている。また、平成 23 年度の組織変更に向け、組織の機能と役割を見直した。特に研修については充実が望まれており、本部業務と委員会の連携強化も検討されている。人事評価については DO-CAP シートに経過を記録することで直前評価からの脱却を目指した。今後も評価者、被評価者双方のスキルアップが望まれる。

四天王寺病院の経営については長年にわたる医局との関係の再構築、病院評価受審に向けた病院組織の再構築の取り組みが実を結び、医師、看護師の確保と高い稼働率を維持できるようになり経営状態に明るい兆しが見られる。

悲田院高齢者施設建替え工事は大阪府生コン一斉ストの影響を受け、5 か月の延期を余儀なくされた。また、大阪でも震度 5 を記録した 3 月 11 日の東日本大震災による直接の被害はなかったが平成 23 年度には資材等の不足も懸念される状況であり、予断を許さない状況が続いている。

措置時代の体質からの脱却の過程として「守・破・離」の「離」の時期と位置付け、当事業団独自のスタイルを形作りつつあるが、まだまだ端緒についたに過ぎない。法人の宣言の具現化を目指し、自立・自律を確かなものにするために、生みの苦しみに向き合い、さらなる PDCA を積み重ねる必要があることを確認した年であった。